

札幌彫刻美術館友の会会報

# いすみ

第14号

2006年1月1日発行

(題字:國松 明日香氏)

## 本郷新彫刻シリーズ 14



「太陽の母子」

(札幌市中央区宮の森・宮の森緑地)

両手を伸ばして、燐燐（さんさん）と降り注ぐ陽光を浴びるわが子。その健やかな体を温かく抱き、見守る若い母親。その理知的な瞳が、この子の将来に幸あれと願っている。

道内には稚内市の宝来公園（野外）、江別市の大麻文化センター（室内）の3点がある。

1976(S51)年作 高さ140cm

(撮影 仲野三郎会員)

## 目 次

本郷新彫刻シリーズ 14 「太陽の母子」	表紙	
目次 彫刻美術館行事予定	2	
巻頭言 「彫刻美術館の発展めざして」 橋本信夫	3	
伝統的な彫刻の概念とインスタレーションの関係について 坂巻正美	4	
信州・美術館めぐり—碌山美術館を訪ねて		
濱久子 斎藤公美雄 南雲久美子 小松崎恵子 松田晶子 島正孝	7	
本郷新とテラコッタ	白石 齊	11
抜海の目		12
2005年は本郷家にとっても歴史の節目	柳川慶子	13
友の会だより/2006年新年会と講演会		13
ギャラリーシリーズ 10 「宮の森美術館」	原典夫	14
展覧会案内		14
編集後記		14

## 札幌彫刻美術館展覧会・行事予定（1月—3月）

### ◆本館

▽3月20日まで 平成17年度後期収蔵作品展「鳥を抱く女シリーズ」

### ◆記念館

▽3月20日まで 平成17年度後期収蔵作品展「素描展パート4」

### ◆散策と美術鑑賞の会

▽3月11日（土） ステージVI「春雪の三角山」

### ◆教育普及事業

▽1月12日（木） 子ども（小学生）造形教室

▽2月18日（土）、19日（日） 造形教室（テラコッタ）

◇開館時間：3月まで 午前10時—午後4時 ◇休館日：月曜日（月曜日が祝日などの場合は翌日）

◇交通機関：地下鉄東西線「西28丁目」駅下車 ジェーアール北海道バス「環20」山の手環状線3番乗り場、「彫刻美術館」下車、徒歩10分

（財）札幌彫刻美術館 〒064-0954 札幌市中央区宮の森4条12丁目 TEL011-642-5709

## 巻頭言

# 彫刻美術館の発展めざして

## “碌山”をモデルにダイナミックな支援活動を！

友の会会長 橋本 信夫

明けましておめでとうございます。

昨年は札幌彫刻美術館と札幌芸術の森美術館の共催による「本郷新生誕100周年記念展」が大きな高まりをもって終了した。これに合わせて友の会でも記念誌の発行、記念シンポジウムの開催や碌山美術館訪問などのさまざまな企画を実施し、大きな成果を上げた。本年はこれらの経験をバネに札幌彫刻美術館を支えるために一層の努力を重ねたい。

さて新聞報道によれば、札幌市出資団体評価委員会が財団法人札幌彫刻美術館と財団法人札幌芸術文化財団との統合を求めたとのことである。厳しい財政難にあえぐ道や市にとって補助金制度に依存したこの館の運営体质の抜本的な改善は避けられないものと思われる。しかし、この美術館の運営母体がどうであれ、またどのような運命をたどろうとも、人口190万の国際文化都市・札幌の数少ない芸術の殿堂を支援し、発展させることは市民の切実な願いである。これを機会に市民に広く開かれ、親しまれる美術館として大きく脱皮し、面目を新たにしてほしいものである。

幸いにして友の会の会員は150人の大台に迫りつつある。数年前から当会は近代彫刻

の開祖とされる荻原碌山の彫刻を常設展示する長野県安曇野市の碌山美術館友の会と会報を通じた交流を重ね、遂に昨秋、会員同士の交流を実現した。この美術館は地方にありながら入館者数は年間7万人を超えており、さらに注目すべきはここでは美術館、友の会、地域住民が一体となって補助金を受けることなく自立運営をしていることだ。この友の会のモットーは「できる人が、できる時に、できることを」で、この精神をもとに地域ぐるみのさまざまな支援活動が行われている。

私たちもこの友の会をモデルに、それぞれの会員の個性と経験を生かしつつ、柳のようしならやかで強靭な組織となって札幌彫刻美術館の発展のために永続的でダイナミックな支援活動を展開するつもりである。

このために館と会との密接な連携、さらには会員による草の根PRと会報やインターネットによる迅速な広報活動が不可欠となっている。

年頭にあたり、この美術館が文化都市札幌の名に相応しい宝冠としていつまでも光り輝くよう祈念してご挨拶といたします。

# 伝統的な彫刻の概念とインスタレーションの関係について

坂巻 正美

(彫刻家・北海道教育大学助教授)

インスタレーションについて知りたいということで本会報の原稿執筆をいただいた。一般的な説明は、冒頭の3行で終わるのだが、彫刻との関係で誤解の無いように理解していただくなためには、長文となることをお許し頂きたい。

インスタレーションとは、複数の物体を配置して一つの「場」を「空間造形」する表現方法である。1960年代頃から美術用語として一般的にも使われるようになってきたようである。インスタレーションは伝統的な芸術の概念が大きく拡張されていく過程の中で絵画と彫刻の両方向から「空間」の問題を取り込んだ表現が展開され、両者の表現が融合する領域として定着してきた。彫刻表現の延長線上で展開されたインスタレーションでは、空間に配置する素材と素材の関係や空間構成そのものを表現技法の重要な要素として斬新な作品形態が創造されてきた。本稿では、これらを、彫刻的インスタレーションと呼ぶことにする。絵画的インスタレーションの場合も、コラージュ、アッサンブルージュから写真や映像などを取り入れながら空間全体をひとつの作品として展示構成していく表現がみられる。インスタレーション表現の詳細については、絵画的インスタレーションとの関係についても述べていかなければならないが、これを絵画の変遷から見ていくことは、限られた紙面の関係上、絵画の専門家にお任せしたい。本稿では、彫刻家の立場から彫刻表現の変遷を辿り、彫刻的インスタレーションについて伝統的な彫刻の概念と関連して考えていきたい。

さて、現代の彫刻的インスタレーションについて考えていく前に、簡単に伝統的な彫刻の概念について確認しておきたい。西洋的伝統彫刻の領域では、造形する上でフォルム、バランス、ムーブマン（塊としての形の意識、塊と塊の量的均衡の意識、量塊の動きの意識＝ボリュームの躍動）が彫刻の3大要素としてあり、「部分の形と全体像のバランスの意識」は無視することのできない重要な彫刻の概念である。彫刻家は、この概念を制作の原動力として、一つの彫刻像を空間に存在させる造形操作を繰り返すことで作品の完成を目指す。立体と空間にかかるバランス感覚と彫刻制作上の伝統的概念が、一つの彫刻を空間に立ち上げるのである。大理石でできたギリシャ彫刻の肌の美しさは、表面の細工の妙技がその効果となっているわけではない。彫刻の制作体験者や長年鑑賞を続けていた愛好家が、彫刻の3大要素を実感として獲得したうえで彫刻作品を立体と空間の関係から鑑賞するとき、彫刻表面の形の印象を支えているのは、形の表面処理ではなく、像のボリュームの中心軸から表面に向かって構築された「量塊の形」（フォルム）と空間とのバランスについての制作上の概念であることを理解するだろう。このような伝統的な彫刻の概念を踏

またその上で、それを空間の概念へと拡張し、彫刻的インスタレーションは展開されていく。現代の彫刻的インスタレーション作品の鑑賞では、展示空間に配置された物と物の関係からその素材のイメージや意味を読み取る。その空間構成には、どのような概念が秘められているのかを解釈し、鑑賞者は空間全体について思考と経験をフル稼働させ、展示空間を移動しながら、さまざまな視点で作品のイメージを感受して楽しむことができる。ギリシャやルネサンスなど、古典彫刻の鑑賞では、その作品が嘗てどのような場に設置されていたのか、彫刻の周りの神殿や教会の空間との関係を考えながら「場」全体を一つの作品として見ていくことが大切である。それは、神々や聖人の像が本来の意味を取り戻し、彫刻や絵画が建築と共に空間構成された一つのインスタレーション作品であることが見えてくる。古典彫刻作品の美術館展示は、嘗てその彫刻が設置されていた建築空間から切り取られたものであり、まったく別のインスタレーション作品として設置されたものを見ているのである。このような展示では、展覧会コンセプトのバイアスがかかっていることを考慮して鑑賞しなければならないだろう。本来、彫刻は設置空間との関係で「場とのインスタレーション」として扱われてきたものなのであった。

こうして彫刻の原点を振り返ると、彫刻は単独の作品として作られているのではなく、その像が置かれる寺院などの建築と周辺の環境や空間との構成が総合的に考えられている。単独で設置された彫刻を、空間全体と対応したインスタレーションの一部として捕らえていくことで、その空間がどのような考え方で作られたのか、空間全体の造形コンセプトと関連した形が見えてくる。彫刻は「環境的な空間造形」を担うものとして「場」全体に影響を与えていく。そこには、どのような配置で人々が集い、何を行う場なのかなど、「部分と全体のバランス」を考えた大規模なインスタレーション作品が出現していく。このインスタレーションは、宗教や思想などの造形コンセプトにより、全体が精神的体験の装置として機能する。彫刻は教義や思想を伝えるための道具として、空間全体を構成する重要な部分を担ってきた。

古来、彫刻家は、「部分の形と空間の全体像に対するバランスの意識」が、制作上重要な概念であることを踏まえ、自らの仕事を「理想とする空間の質」のためにささげてきた。この彫刻概念は、「場」や「環境」などと関連しながら、「空間概念」へと拡張していく考え方としても重要であることがわかる。ミケランジェロは、自分の職業を画家や彫刻家よりも建築家だと言うことが多かったそうである。彼は、教会を建て壁面に絵を描き、床に彫刻を配置した。そこでは、キリスト教の教義に従った音楽やパフォーマンスが繰り広げられる。このようなミケランジェロの総合的空间造形から、美術館が切り取るように展示した絵画や彫刻などの一部の作品は、その時々の展覧会コンセプトによって別の解釈が付加されているのだが、作者のコンセプトを感受するためには、現代のインスタレーション作品の鑑賞と同じように、本来あるべき場で空間全体を再現すべきなのであろう。レオナルドにいたっては、芸術以外の様々な活動を見ても分かるように「部分と全体のバランス意識」が、芸術領域での「空間造形」を超えて、当時の社会構造をインスタレーションして

いくことを構想していたようにも見える。レオナルドの偉業は、現代ドイツの彫刻家ヨーゼフ・ボイスの「拡張された彫刻概念」である『社会彫刻』にも受け継がれている。レオナルドは、芸術領域を超えたのではなく、本来、芸術とは、人間の創造性にかかわる全ての行為を指して使うべきなのであることを、その活動により示したのではないだろうか。ボイスの『社会彫刻』も、伝統的な彫刻の概念である「部分と全体のバランス意識」が、「社会という空間を彫刻する」ために展開されることを構想して、インスタレーションの手法を多用し、芸術の概念を拡張していったのである。

ボイスは、社会そのものを造形素材として空間造形することを『社会彫刻』と言った。造形素材としての社会とは、人間の行為そのものをも示すのだが、この難解な概念を鑑賞者が解釈するための道具として、さまざまなオブジェを取り入れたインスタレーションやパフォーマンスの手法を多用した作家でもある。その代表的な作品として、『7000本の櫻の木』とそれに付随する作品群がある（ハイナー・シュタッヘルハウス著「評伝ヨーゼフ・ボイス」：美術出版社：参照）。ボイスは、彫刻の概念を「社会という空間」に拡張させるべく、様々なインスタレーション作品を創造していった。インスタレーションの本来的な意味を深く知るためにも、古典彫刻と現代の拡張された彫刻表現について、様々な作品を取り上げながら考察すべきところだが、紙面の関係上、割愛しなければならない。ぜひ、上記のボイス資料をごらん頂きたい。

すべての芸術表現には、作品を表現する空間の問題が常に付きまとつ。空間の問題を除いたところで発表が成立するような芸術表現は、あり得ないだろう。インスタレーションによる表現は、現代に新たな空間概念を創出する試みとして展開してきた。優れたインスタレーションの展示空間では、作品による物理的な空間の質の変化だけではない身体感覚的実感を伴う空間体験が創起され、新たな空間概念が創造されている。古典彫刻が、嘗て置かれていた空間もまた、宗教や思想をコンセプトとして人間の理想像の疑似体験を目的として空間造形された装置であり、現代のインスタレーションと繋げて見ていくことで、その本来の造形概念に立ち返って鑑賞されていくのではないだろうか。このことから、現代のインスタレーションによる作品表現は、古典的なやり方を現代に新たに使える形に組み立てなおす作業でもあると考えられる。ボイスに連なる、現代のインスタレーションでは、その時々の社会状況と連動して変化するさまざまな「環境」や「場」の問題について、かつて有効に機能していた時代の自然と繋がった人間的な社会システムを現代に再構築するイメージとして「新たな空間概念」を創造する実験的試みがおこなわれている。

※ 「 」内は、一般的な意味ではなく、主に彫刻の立場から用いた。『 』内は、作品タイトルや名称を示している。

(原文のまま)

# 信州・美術館めぐり—穂山美術館を訪ねて

札幌彫刻美術館友の会主催の「北アルプス安曇野観光と信州美術館めぐり 3日間の旅」が 10月 2 日から 2 泊 3 日のスケジュールで行われ、会員など 17 人が参加した。以下、旅の概要と感想などを参加者から寄せてもらった。

## 満喫した美術館巡り

浜 久子（会員）

10月 2 日 新千歳空港 12 時

40 分発、14 時 10 分、きれいな松本空港に着く。

早速ガイドつきバスに乗る。途中お迎えがあり、その先導車につき、まず安曇野の荻原守衛（穂山）のお墓参り。お花とお線香を用意してくださる。墓地の一区画が荻原一族の墓で旧家の歴史を物語っている。ご当主が挨拶に見えられる。墓地のそばに生家はあったが火事で焼け、蔵だけが残った。

穂山美術館に行く。最初に所賛太館長のご挨拶、学芸員の説明のあとゆっくり見学。5時すぎに穂高ビューホテルに荷物を置いてから郷土料理のふくらい屋で穂山美術館の理事長、館長、会長ら関係者 7 名と夕食をとりながら歓談。真っ暗くなり、明かりのない山道の上の穂高ビューホテルに着く。

3日 2 年前開館の安曇野高橋節郎記念美術館、ジャンセン美術館。長野に向かい善光寺をお参りした後、門前町のたきやで昼食。午後、東山魁夷

美術館と建物続きの信濃美術館を見学、ホテルに戻る途中、北アルプスが初めて姿を見せ、ガイドが山の名前を懸命に説明。

4 日 長野県原産の穂高天蚕センター、大王わさび農場を見た後、豊科美術館へ。たまたま、片岡鶴太郎作品展をしていたので入場者は多い。安曇野そばの昼食後、日本で一番高い位置にある松本空港は霧のため少し出発が遅れたものの、千歳空港に 4 時半、無事着陸。千歳空港で解散。有意義

な旅に感謝。

「善光寺」渋谷美智子



## 荻原穂山に魅せられて

斎藤 公美雄（会員）

日本近代彫刻の扉を開いた荻原守衛（穂山）は明治 12 年（1879 年）、長野県南安曇郡東穂高村の農家の五男として生まれ、22 歳でニューヨークからパリの画学校へ留学。その間にロダンの彫刻「考える人」を見て強い衝撃を受け、日本人として初の弟子となる。

碌山は帰国に先立ち、帰っても師と仰ぐべき人がいないことをロダンに告げると「自然を師として研究すればそれが最も良い師ではないか」と励まされる。碌山は別れの記念として芸術家ロダンにふさわしいものをと考え、鈴木春信の浮世絵2枚を贈っている。

明治43年(1910年)、30歳5ヶ月で惜しくも肺結核により急逝したが、15点の珠玉の彫刻を残した。絶作「女」は最高傑作と言われ、没後、秋の文展に出品、文部省買い上げ、重要文化財となった。

財団法人碌山美術館は昭和33年、町民の創意によって、30万人の浄財と多くの支援により誕生し、美術館と友の会が一体となって自主運営を守り続け、2年後の平成20年、開館50周年を迎えるとしている。

碌山美術館へは平成初年、東京の画家、小松崎永夫ご夫妻のご案内でご縁ができ、数回訪問し、会員として情報を得る中でいつの日かの訪問を念願していたところ、十数年ぶりに4回目の訪問が実現した。さらに、美術館のある穂高町が5町村の合併で安曇野市穂高と表示変更になった10月1日の記念すべき時期に訪問の機会を得た。美術館関係者のご配慮により、思いがけず、碌山の生家を訪ね、墓参もでき、感無量であった。

美術館では碌山の作品に再会し、にじみ出るような情感がかもし出され

ていることに新たな感動に浸り、安らぎを得た。訪問に際しては碌山美術館の柳沢理事長はじめ館長、会長ほか、幹事の方々の心温まるもてなしを受け、意義ある日となり、感謝している。

海拔600メートルの澄んだ空気と水の穂高、碌山美術館へのさらなる訪問を重ねたい心境で帰路に着いた。

### 飛行機に乗って善光寺

南雲久美子(一般)

誘いを受けて信濃の美術館をめぐる旅に参加しました。どなたとも面識がなかったのですが、美術を愛する気持ちちは一つ、楽しい旅をさせていただきました。

「牛に引かれて善光寺参り」と知識では分かっていたつもりでしたが、実際にに行ってみて、私の頭の中の地図にその位置関係がはっきり刻まれました。考えていた所よりもかなり北でした。本当に方向

音痴、地図音痴なのです。

南雲久美子 2日目、軽い気持ちで見たジャンセン美術館は興奮と感激を私にくれました。鉛筆、パステル、水彩、墨などで描かれた人物は生きと生きていて、裸婦を描いている私にはすばらしいプレゼントでした。目の保養、頭の栄養になりました。買ってきた画集を何度も見ています。

東山魁夷館は作品のための下絵が多く、それはまたそれで面白かったのですが、水を上手に使った建物が気分をゆったりさせる設計でとても素敵



「碌山美術館前庭」

でした。

最後の日、昔、朝のドラマで見た期待のわさび田へ行って本当にがっかり！ 一面、黒い寒冷紗に覆われ、何も見えないです。せめて観光用にほんの少し覆いを取って見せてほしかったと思いました。

寒い、寒いと言いながら、わさびソフトを食べました。名物のおそばはおいしかったけれど、北海道のおそばの方が勝っていると思いません？

乱気流で心配した飛行機も、遅れはしましたが、無事に飛んで札幌に帰りました。そしていつもの一言、我が家が最高！

## 信州の旅

小松崎 景子（会員・東京都）

私は長野県北部、大町に生まれました。そこは日本アルプスを背に、夏も涼しい所でした。父の存命中は、北海道、東京などから本郷新さんをはじめ親戚、知人が集まり、20人を超すこともありました。燕岳の近くの中房温泉、信濃三湖などに行楽に行きました。

洋画家・三岸好太郎の親友・保野第四郎（画家）の兄、第三郎が私の父であり、本郷新の温子夫人は父の妹で、私の叔母にあたります。本郷さんと叔母が結婚し、敗戦直前の昭和19年に亡くなりましたが、その後も特に親しくしていました。いとこたちは子供のときに交流があったので親しく過ごしてきました。

父は東京で役人をしていましたが、現在の中部配電当時の安曇電気に招

かれ、東京とのパイプ役として昭和電工、紡績工場などを地方に誘致したり、水力発電の開発も進めて来ました。当時、学校にお弁当を持って行った頃、父が電気ストーブの設置を各学校に勧めていたのです。「お昼になると、温かいお弁当が食べられるのはあなたのお父さんのおかげね」と喜ばれたものです。

昨年は本郷新生誕100年展が札幌であり、私は2回も札幌に行くことができました。

さいとうギャラリーは当時、毎年、東京の展覧会にかかわっておられたのでお知り合いになり、その後、北海道の好きな小松崎は札幌での7回の個展のうち、最後の時計台ギャラリー以外、6回もさいとうギャラリーでやらせていただきました。

かつて斎藤ご夫妻とは美術館と一緒に行ったのがきっかけで、碌山の作品が大変気に入られ、今回の札幌彫刻美術館友の会が碌山美術館と信州の旅に発展されたとのこと。碌山美術館友の会にも入会され、そちらの方々とも交流することができ、良い旅になったことをうれしく思いました。

ジャンセン美術館、北アルプスの清流と大王わさび、信州はやっぱり素晴らしい所です。

## 友の会に入会して

松田 昌子（会員）

長野は美術館の多い所で、行ってみたいと思っていたので誘いを受けて即答しました。

晴天に恵まれ、上空からは北アルプスの山々も見ることができました。眼下の緑のじゅうたんは友の会の方々を歓迎しているかのようでした。

私は美術に関して縁はないのですが、関心はありました。暇と資金ができると旅に出かけ、旅先の美術館に足を運ぶこともあります。今回の美術館めぐりは3日間の旅でしたが、ご一緒させていただいた会員の方々の温かい雰囲気に誘われるまま会に加入いたしました。私には芸術的な素養がありませんので、会員の方々のご指導をいただきながら学んでいきたいと思っております。

このたびの美術館巡りで印象に残った美術館は高橋節郎美術館でした。漆芸術の作品に圧倒され、しばらく釘付けになりました。また、東山魁夷の「白馬」も印象に残った作品でした。これからは会の皆様と仲良くお付き合いできるよう努力してまいりますのでよろしくお願ひいたします。

### 信州に親しい友を迎えて

島 正孝（会員・信州在住）

画家、ジョルジュ・ルオーは「美術は自我の熱烈な告白だ」と述べている。

自我の熱烈な告白は絵画だけではなく、自我の最も直接的で、その感覚が内面的である音楽は、より純粹感覚に近いだろう。

彫刻家・荻原守衛や本郷新の作品に接するたびに、ある種の音楽的旋律をその作品から感じ取るのは私ひとりではないと思う。

10月2日は残念ながら、秋晴れの北アルプスの峰々を遠望できなかつたが、にこやかに親しく、札幌彫刻美術館友の会会長の橋本さん、斎藤さんご夫妻、そしてたくさんの会員の皆様を信州にお迎えして、ご一緒に穂山美術館を見学し、夕食を共にした。

特に、常に行動をご一緒させていただいた斎藤さんご夫妻からは、短い時間ではあったが、この世に満つる美の世界を愛し、信頼し、よき理解者であることの大切さをお教えいただくことができた。ありがとうございました。

あのほの暗い会堂の、作品群の周りに穂山と同じく31歳の若さでこの世を去ったF・シューベルトの作曲した最後のピアノソナタ第21番変ロ長調作品960の甘美で暗く、しかし、救済のピアノの調べが鳴り響いていたのを、今回はよりいっそう印象深く聞くことができた。

この同じ音楽的体験は本郷新の作品の前に立った時にも経験した。その時はL・V・ベートーベンの後期の弦楽四重奏曲であった。

彫刻を見ながら音楽を感じ、音楽ホールで室内楽を聴きながら、親しい彫刻家の作品を思い浮かべている。

10月3日、旅を無事に終えられ、札幌にお帰りになれた皆様との再会の時には、存分に彫刻と音楽の話をいたしたく願っている。

## 本郷新とテラコッタ

陶芸家 白石 齊

### 陶器づくりの技法から想を得た「北方シリーズ」

岡山県・津山文化センターの前庭において本郷新、重子夫妻列席の下で1966年5月8日、作者によって「朝(あした)」と命名されたモニュメントの除幕式が挙行された。彫像は東京国立近代美術館所蔵の「鳥を抱く女」を新しく追加铸造したもので、今も、中国山脈を背に立っている。

私は津山市出身で、この文化センターには深く関わり、特に、ホールの壁面は私のモザイクで埋め尽くされている。本郷先生を推薦したのも私であり、このことは私の大きな誇りである。

本郷先生との出会いは、1963年春、私が独立して東京多摩市(当時は多摩村)に窯を開いて間もなく、知人を介して訪ねられた。本郷先生は当時すでに著名で、テラコッタも勉強されていて、作品もいくつかお作りになっていた。お話を聞いているうちに、先生はテラコッタの肌の表情の色出しが大変ご不満であり、そのマチエールについてのご相談であると分かった。私はまず、「私の粘土を使って作ってみてください」ということから、先生との長いお付き合いが始まった。

先生は、小田急線梅ヶ丘のアトリエから京王線に乗り継いで、桜ヶ丘の私のアトリエまで、お手伝いさんと二人で幾度も熱心に通われて(小樽の春香山に窯を作られるまで)、数多くの作品を制作されている。

そのころのテラコッタは、木内克氏の作品をはじめとして、作品の表面に紅柄土を塗って彩色したものが一般的で、素材の粘土から工夫したものは大変少なく、特に本郷先生の作品に施されているような、焼く前に色粘土(特に白色)で彩色して、それをふき取って、表面のマチエールに変化を施す技法は、本郷先生と私との工夫によるものである。これらの作品は、ご覧いただければすぐ分かるものなので、他のテラコッタ作品と比べてぜひ鑑賞してほしいと思う。

また、陶器作りの技法から想を得て作られた、粘土を長く伸ばして、その粘土紐を積み重ねたまま表現されている手づくりの形「北方シリーズ」も、本郷先生独自の技法であり、これらの作品のほとんどは私のアトリエ、桜ヶ丘の窯で焼かれている。

このように、彫刻とは一味違った陶器技法に魅せられた先生は、テラコッタの作品ばかりでなく、陶器のアクセサリーや置物など、さまざまな作品を作られている。特に私の作った大皿に鳥や魚の絵を描かれたいくつもの作品、その中でも新聞紙をちぎって抜き描きされた鳥の絵の大皿は忘れない作品で、機会があればもう一度ぜひ見たいと思っている。

## 抜海の目

### 本郷新 100 年記念展を振り返る

2005 年は敬愛する本郷新生誕 100 年の記念すべき年であった。

この記念すべき年にどのようなことがどのように行われたのだろうか。その経過を振り返って記録として残しておきたい。

手始めに、多くの皆さんが毎日目にする北海道新聞に触れてみよう。

本郷新作品展の開催は札幌芸術の森美術館と札幌彫刻美術館の両館を会場に、5 月 21 日から 6 月 19 日までの約 1 カ月であった。この期間とその前後の広告をはじめとする記事などの掲載は通常の展覧会に比べて多かったように思う。

広告は、新聞 1 ページの幅で 5 段（全 5）の大きな広告と半ページ幅で 5 段（半 5）の中広告、さらに半ページ幅 3 段（半 3）の小広告の 3 種類に分類されるが、第 1 弹は 4 月 26 日の中広告であった。その後 6 月 14 日までに大 2、中 5、小 9 の合計 16 回が掲載された。

記事では、5 月 17 日の「泉の像」を第 1 回として「無辜の民」までの 9 回にわたったルポ形式の作品紹介、「まちかどの本郷新」がある。ここでは作品を高いアングルから撮る、今までにはない斬新な切り口が目新しかった。また、夕刊の「ミュージアム裏通り」欄にも 5 月 28 日から連続 3 回登場した。その他 4 月から 6 月までの 3 カ月で 33 件の広告と記事が掲載されている。

次に放送では NHK の「新日曜美術館」で特集として取り上げられた。

このほか訪れた人が目にしたものとして、芸術の森情報季刊誌「ルア」と彫刻美術館の館報 100 年記念号にそれぞれ特集記事、さらに、専門的になるが、時計台ギャラリー発行の「21ACT」、北海美術ペンクラブ発行の「美術ペン」にも 2 回掲載された。

当然のことながら図録「生誕 100 年本郷新展」も 143 ページの好企画で両館から刊行されている。

この他のメディアとしてはインターネットが挙げられよう。「ようこそ札幌に：学芸員の解説と写真で綴る本郷新作品集」が登場、全国の本郷新の作品が解説付きで紹介され、青い日記帳—彫刻家本郷新では主な作品の説明とコメントが、さらには彫刻家本郷新の写真コンテストの募集まで登場した。

友の会ではユニークな企画として 6 月 11 日にシンポジウムを開催、「野外彫刻とアートツーリズム」をテーマに現代の野外彫刻の在り方が本郷新の作品を中心に論議され、10 月初旬には彫刻界の先駆者である長野の荻原碌山を訪ねるツアーも行っている。

さて、これらの活動の成果を示すものは何だろうか。その一つの指標は入館者数であろう。彫刻美術館の記念展期間中の入館者は 2600 人と報じられている。

2005 年度の入館者の集計は 3 月末を待たなければならぬが、昨年の年間 6000 人台にどれだけ上乗せがあるのか、結果が待たれるところである。

# 家にとって歴史の節目

柳川 慶子

2005年5月21日は晴天でした。輝く新緑と遅咲きの桜の咲く芸術の森美術館の前庭で「生誕100年 本郷新展」の開会式を迎えることが出来ました。野外での式典を待っている間、準備でお世話になった方々のお顔が浮かんできました。

芸術の森美術館のスタッフの皆さん。彫刻美術館の皆さん。「彫刻家 佐藤忠良一本郷新を語る」と題したDVDの制作でお世話になった彫刻家・佐藤忠良さん。聞き手の世田谷美術館々長の酒井忠康さん。絶版となっていて半ば諦めていた本郷新の著書「彫刻の美」の再販に快くOKを出して下さった中央公論出版社の皆さん。それも100年展の初日に間に合うようにこぎつけていただきました。「彫刻の美」のあとがきを快諾されたのは酒井忠康さん。NHK教育テレビで「彫刻の重さは命の重さ」と題して「新日曜美術館」で特集を組まれたNHKの制作スタッフの皆さん。そして常々、彫刻美術館を支えて下さっている友の会の皆さん一。

たくさんのお世話になった人々の顔が思い出され、感謝の思いで胸がいっぱいになりました。

開会式当日は本郷家と親しく、いつも支えていただく40人余の方々が、東京、横浜、千葉、富山、大阪、四国からツアーを組んで、遠路はるばるオープニングに参加してください、うれしい限りでした。

鬼籍に入った本郷新も息子の本郷淳も、きっと皆さんの傍らで一緒にオープニングに参加していたように思われてなりません。

2005年は日露戦争終結100年、太平洋戦争敗戦60年、ベトナム解放30年、本郷新生誕100年、そして没後25年。さらに、6月5日のNHK「新日曜美術館」の放送日はこの番組が始まって31年目を迎え、1501回目の放送でした。

さまざまな出来事が歴史の節目を迎えた2005年の初夏は、本郷家にとって、いよいよ平和の大切さ、命の尊さを願う精神を次世代に伝える貴重な年になりました。

## 友の会だより

### ■ おめでとうございます

昨年開かれた新道展(9月)、道展(10月)で友の会から次のお二人が見事、会友、会員に推挙されました。今後のご精進をお祈りいたします。

◇新道展会友 吉田二郎さん(油彩)  
◇道展会員 伊藤幸子さん(彫刻)

### ■早川敏之会員に道赤レンガ建築賞

友の会会員で設計事務所を経営している早川敏之さんが設計した留萌館内増毛町の「国稀酒造建築群」に本年度の「北海道赤レンガ建築賞(金賞)」の授賞が決まった。

創造性豊かな建築物を表彰するもので、1882年

(明治15年)創業の当時から残る国稀酒造の木造2階建ての店舗、酒蔵、事務所などを歴史的な景観をうまく残して改修した点が認められた。

### 2006年友の会新年会と講演会

- 日時:1月28日(土)11:00-14:00
- 会場:ホテルオークラ(中央区南1西5)
- 講演会:講師 大内 東(北大大学院情報科学研究科教授、観光情報学会会長)
- 演題 「新春放談:北海道芸術屯田兵」
- 会費 4,000円
- 参加締切り 1月20日  
齊藤美年子まで(011-643-7246)

## ギャラリーシリーズ 10

### 「宮の森美術館」

昨年の春、札幌・宮の森の一角にチャペル美術館、レストランなどの複合施設「宮の森ミュージアムガーデン」が開設された。美術館前の道路沿いに、イタリア在住の彫刻家緒方良信が、中国産の褐色の御影石を組み合わせて造った長さ 20 メートル余の巨大なモニュメントが置かれている。

この「ガーデン」に昨年 10 月、国内外のモダンアート（絵画、彫刻など）を常設展示する「宮の森美術館」がオープンした。

2 階のメインギャラリーには、日本とアメリカのアーティストによる 1960—70 年代の抽象絵画が、1 階には「梱包（こんぽう）の芸術家」として世界的に知られるクリストとポップアートを代表するアメリカのアンディ・ウォーホル、ジャスパー・ジョーンズの作品が展示されている。なお、今後は企画展も開催していくという。

この美術館には、アメリカやヨーロッパの著名な建築家や芸術家がデザインした椅子（いす）やテーブルが、ホールや展示室の備品のようにいくつも置かれている。マッキントッシュの椅子などはライセンス生産のようであるが、ガウディのいすなどオリジナルのものもあり、貴重なコレクションといえよう。（原典夫・会員）

場所：札幌市中央区宮の森 2 条 11 丁目 2-1

TEL 011-612-3500

開館：正午～午後 8 時（定休なし）

札幌彫刻美術館友の会ホームページ

<http://sapporo-chokoku.jp>

## 展覧会案内一札幌藝術の森美術館

〈芸森〉で行われる橋本信夫の会会長の催し

### ■「アフリカン・マスク」—想像力のジャングル

（橋本信夫・邦江コレクション）

▽会期 1 月 21 日

（土）～3 月 26 日（日）

仮面を中心にアフリカ美術の作品約 100 点を展示。



### ■ギャラリートーク「アフリカ美術の魅力」

橋本会長がアフリカ美術の魅力を語る

▽2 月 14 日（土）午後 2 時から

芸術の森美術館 展示室

### ■「北の創始者たち展—虚実皮膜…その後」シリーズ展

講堂（観覧無料）

●坂巻正美展 開催中—1 月 15 日（今号、執筆者）

●上遠野敏展 1 月 24 日—2 月 12 日

●鈴木涼子展 2 月 14 日—3 月 5 日

●伊藤隆介展 3 月 7 日—3 月 26 日

### 編集後記

あけましておめでとうございます。

橋本会長の巻頭言にあるように今年は札幌彫刻美術館にとって歴史的転換点とも言える大きな節目を迎えます。友の会にとっても新しい曲がり角にさしかかる年になりそうです。信州・美術館巡りの原稿ありがとうございました。（大内）

彫刻美術館友の会 会報「いづみ」No.14

2006 年 1 月 1 日発行

〒064-0954 札幌市中央区宮の森 4 条 12 丁目

財団法人札幌彫刻美術館内 Tel・fax: 011-642-5709

発行人 濱 久子

編集委員の連絡先：斎藤美年子：011-643-7246

濱 久子：011-893-5212